

# アクティブマター乱流のメゾスケール連続体モデル

荒木 亮

2020年9月6日

## 目次

1	連続体モデル方程式の導出	1
1.1	仮定とその正当化	1
1.2	場の方程式	2
2	2次元安定性解析	3
3	方程式の無次元化	3
4	渦度方程式の導出	3
5	Fourier スペクトル法を用いた数値計算に向けて	3

## 1 連続体モデル方程式の導出

本節では、先行研究 [1]（とその supplemental material [2]）および同じ著者らによる論文 [3] に基づいて、高密度なバクテリア懸濁液などのアクティブマターをよく記述する連続体モデルを導出する。

### 1.1 仮定とその正当化

連続体モデルを導出するために次を仮定する。

仮定 1. 十分に高密度なバクテリア懸濁液（や自己推進ロッド（*SPR, Self Propelled Rods*）の集合）は、非圧縮アクティブ流体としてよく近似できる。

仮定 2. バクテリア流体の本質的なダイナミクスは平均流速  $\mathbf{v}(t, \mathbf{x})$  で捉えられる<sup>1</sup>。

仮定 1 はバクテリア乱流の実験や SPR の数値計算において密度ゆらぎが小さいことから正当化できる。仮定 2 には議論の余地がある。アクティブマターはしばしば長距離相互作用をもち、このとき平均流速と平均の向きは decouple されているためである。しかし、十分に高密度な環境下ではこれらはよく couple する。そのため、仮定 2 は十分に高密度な環境で妥当としてよい。

---

<sup>1</sup>ここでの「平均」は粗視化して連続場として捉えるという意味か？

## 1.2 場の方程式

仮定 1 の非圧縮性は

$$\nabla \cdot \mathbf{v} = \frac{\partial v_i}{\partial x_i} = 0 \quad i = 1, \dots, d \quad (1)$$

で定義できる。ただし  $d$  は空間次元である。

平均流速  $\mathbf{v}$  は一般化された  $d$  次元 Navier–Stokes 方程式

$$\frac{\partial \mathbf{v}}{\partial t} + \mathbf{v} \cdot \nabla \mathbf{v} = -\nabla p - (\alpha + \beta |\mathbf{v}|^2) \mathbf{v} + \nabla \cdot \mathbf{E} \quad (2)$$

で記述される。  $p$  は圧力、  $\alpha$  と  $\beta$  はパラメータで、  $\mathbf{v}$  に依存するひずみ率テンソル (rate-of-strain tensor)  $\mathbf{E}$  は以降で定義する。

$(\alpha + \beta |\mathbf{v}|^2) \mathbf{v}$  は Toner-Tu モデルでの局所駆動項である。安定性より  $\beta \geq 0$  が要求されるが、  $\alpha$  は正負どちらでも良い。  $\alpha > 0$  のときこの項は系を  $\mathbf{v} = 0$  の等方平衡状態へ駆動する。  $\alpha < 0$  かつ  $\beta > 0$  のとき、速度ポテンシャルは双安定となり

$$v_0 = \sqrt{\frac{|\alpha|}{\beta}} \quad (3)$$

なる特徴速さで決まる大域極秩序状態となる。

最後に対称かつトレースなしテンソル  $\mathbf{E}$  について議論する。これを、active nematics の理論を元にして

$$E_{ij} = \Gamma_0 \left( \frac{\partial v_i}{\partial x_j} + \frac{\partial v_j}{\partial x_i} \right) - \Gamma_2 \nabla^2 \left( \frac{\partial v_i}{\partial x_j} + \frac{\partial v_j}{\partial x_i} \right) + S q_{ij} \quad (4)$$

と表現する。

$$q_{ij} = v_i v_j - \frac{\delta_{ij}}{d} |\mathbf{v}|^2 \quad (5)$$

は  $\mathbf{Q}$  テンソルの平均場近似であり、アクティブ応力 (active stress) の寄与を表す。  $\gamma_0 > 0$  のとき  $S = \Gamma_2 = 0$  ととれば、式 5 は通常の粘度  $\Gamma_0$  の rate-of-strain テンソルとなる。

安定性解析から、  $\Gamma_0 < 0$  を許すとき  $\Gamma_2 > 0$  である必要がある。また、  $S > 0$  は puller で  $S < 0$  は pusher なアクティブマターを表現する。

直感的には、  $\Gamma$  の項は応力テンソルの ( $\mathbf{v}$  に対し線形な) 機械的な展開から生じ、  $\Gamma_2$  は長距離多粒子相関に対応すると理解できる。

式 4 を式 2 に代入して閉じた方程式が得られる。

$$\begin{aligned} (\nabla \cdot \mathbf{E})_j &= \frac{\partial E_{ij}}{\partial x_i} = \Gamma_0 \left( \frac{\partial v_i}{\partial x_i x_j} + \frac{\partial v_j}{\partial x_i x_i} \right) - \Gamma_2 \nabla^2 \left( \frac{\partial v_i}{\partial x_i x_j} + \frac{\partial v_j}{\partial x_i x_i} \right) + S \left( \frac{\partial v_i v_j}{\partial x_i} - \frac{\partial}{\partial x_i} \frac{\delta_{ij}}{d} |\mathbf{v}|^2 \right) \\ &= \Gamma_0 \frac{\partial v_j}{\partial x_i x_i} - \Gamma_2 \nabla^2 \frac{\partial v_j}{\partial x_i x_i} + S \left( \frac{\partial v_i v_j}{\partial x_i} - \frac{\partial}{\partial x_j} \frac{1}{d} |\mathbf{v}|^2 \right) \\ \nabla \cdot \mathbf{E} &= \Gamma_0 \nabla^2 \mathbf{v} - \Gamma_2 (\nabla^2)^2 \mathbf{v} + S (\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v} - \frac{S}{d} \nabla |\mathbf{v}|^2 \end{aligned}$$

ここで

$$\lambda_0 = 1 - S \quad \lambda_1 = -\frac{S}{d} \quad (6)$$

とおけば,

$$\frac{\partial \mathbf{v}}{\partial t} + \lambda_0 \mathbf{v} \cdot \nabla \mathbf{v} = -\nabla p + \lambda_1 \nabla^2 \mathbf{v} - (\alpha + \beta |\mathbf{v}|^2) \mathbf{v} + \Gamma_0 \nabla^2 \mathbf{v} - \Gamma_2 (\nabla^2)^2 \mathbf{v} \quad (7)$$

をえる.

$\Gamma$  の項は Swift–Hohenberg 理論における高次微分項と似ており, このモデルにおいて準カオス的な流れパターンを作り出すために不可欠な項である.

## 2 2次元安定性解析

## 3 方程式の無次元化

## 4 渦度方程式の導出

## 5 Fourier スペクトル法を用いた数値計算に向けて

## 参考文献

- [1] Henricus H Wensink et al. Meso-scale turbulence in living fluids. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* 109.36 (2012).
- [2] Henricus H Wensink, Julia M Yeomans, and Raymond E Goldstein. Supporting Information Appendix : Meso-scale turbulence in living fluids. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* (2012), pp. 1–9.
- [3] Jörn Dunkel et al. Minimal continuum theories of structure formation in dense active fluids. *New J. Phys.* 15.22pp (2013), p. 45016.